



TITLE:

宇宙を観る, 人生を観る : 巻頭随筆 :
ハリ彗星を思ひ浮べつゝ

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 宇宙を観る, 人生を観る : 巻頭随筆 : ハリ彗星を思ひ浮べつゝ. 天界 1941, 21(236): 33-35

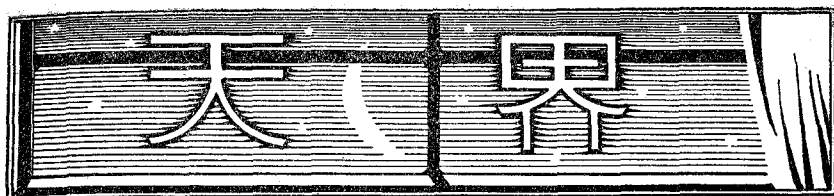
ISSUE DATE:

1941-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168124>

RIGHT:



第236號 (第 21 卷)

(昭和16年) 2 月 號

巻頭

宇宙を觀る、人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

【ハリ彗星を思ひ浮べつゝ】

今この稿を書いてゐる十二月の10日過ぎは、カニンガム彗星が、多くの天文ファンの待望の通りに、いよいよ此の月末(即ち、年末)に大々的な珍らしい姿に現はれて來るか、どうか? 毎日、星圖を眺めつゝ、毎夕、西の空を仰ぎつゝ、實はハラハラした氣持ちである。なにしろ、こんどのカニンガム星は、妙な巡り合はせで、來る一月10日過ぎには太陽と會合するのであつて、しかも其れは“内合”であるから、太陽と彗星と地球とが一直線上に並ぶことになるのであつて、距離の遠近をも同時に考へれば

$$\text{(太陽)} \xrightarrow[1450\text{萬里}]{0.38\text{單位}} \text{(彗星)} \xrightarrow[2300\text{萬里}]{0.6\text{單位}} \text{(地球)}$$

これが、うまく“太陽面通過”と言つたやうな現象に發展して呉れると、益々面白いのであるが、どうも、今までに知られてゐる軌道要素から見ると、このやうな珍らしい藝當を見せてくれないらしい。しかしながら、この“内合”の日附けに近い一月15日に此の彗星は近日點を通過するのであるし、しかも此の時の近日點距離(太陽から彗星までの距離)が、只の0.369單位(5540萬キロ、即ち1400萬里)といふ稀有の近距離になるのであるから、此の一事から考へて見ると、一體、この彗星は、どんな面白い芝居をして見せることになるか、全く豫想が付かないのである。プロバビリテから言へば、

- (1) 案外、つまらない姿のまゝ、黙つて通り過ぎるかも知れない。
- (2) しかし、ウツカリすると、30年以前の、あのハリ大彗星の壯觀を呈するかも知れない。

この(1)と(2)とが、今では五分々々であるところに、吾々の待望の面白みが懸つてゐるのである。

近年、諸家の研究……と言つても、彗星の運行や、軌道の議論などは、今日の天文家の最も御得意とするところであつて、例へば、エンケの彗星のやうな

ものならば、其の近日點通過の時日を、2~3時間の誤差以内に確實に豫言することが出来るし、ハリ彗星の如きでさへ、一日以上の誤りが無い程度に豫言することが出来るのである。けれど、事、その光度や、殊に其の尾の模様などに關する問題となると、なかなか其の豫言が當りにくい、まづまづ氣象家の天氣豫報の程度以上には確實を保證する事は出来ないのである。之れ畢竟するに、星の運行は、ニュートンの引力論だけを利用すれば、完全に解決することが出来るのだけれど、光や、尾や、其の他の物理的性質は、之れを支配する力が一つや二つではなく、熱、光、電氣、化學成分、形狀、質量等々いろいろな點を複雑に考へ合はせなければならぬために、今日は未だ、甚だ一般的、ボンヤリした豫想しか許されない状態にある。こんなわけであるから、吾々も、こわごわながら(當らないかも知れない!!と、心配しながら)、今3~4週間に迫つて來る此のカニンガム彗星の活躍する状態を、夢心地で、腦裏に書きつゝあるのである。

まづ、今日までの諸家の經驗を綜合して見ると、彗星の光度や尾の現はれ方は、太陽からの距離によつて定まるといふことになつてゐる。殊に其の尾は此の太陽からの距離が非常に大きい原因となる。“太陽からの距離の2乗に逆比例する”などといふ甘いものではなくて、4乗にも、6乗にも逆比例するやうな現象を呈した例が、今までに澤山あるのである。こんどのカニンガム星は、近日點距離が0.369單位であるから、此の一點から見ただけで、年末から年初へかけ、光輝もウンと増すし、尾もスバラシイ發展を遂げるだらう!?と豫想される。近着のアメリカの新聞紙を見ると、十一月の初めの頃の頁に、既に“此のクリスマスには驚くべき大彗星が現はれる”といふ2頁にわたる大記事を載せてゐる。さすが“センセーションの國”の新聞だと、其の手まはしの早さに感心する次第である。自分も、やはり“之れはハリ彗星ぐらゐになるのじやないか?”“或は少なくともかの明治43年の一月に急に現れた無名の1910a星ぐらゐになるのではないか?”と、切りに考へる。

もはや、今の若い人々には“自慢”をしても宜からうと思ふが、自分は、1910年(明治43年)にあのハリ大彗星を見た一人である。あの年には、待望のハリ星だけでなく、誠に突然と、(前記の)1910a彗星といふのが現はれた。此の1910aは、餘りに突然と、しかも急激に大彗星として出現したが故に、世界中の澤山の人々が殆んど同時に發見したので、遂に本統の發見者といふものは嚴密に定められず、“無名”のまゝになつて了つた。なんでも、南大西洋を航海してゐた船の船長が最初に見つけたとかいふ噂もある。當時、三高の2年生であつた自分も之れを、明治43年の一月20日頃、毎夕、友人と吉田山に散歩して、其の星の雄姿を眺めたものである。尾は40°、頭の光度も1等級であつた。しかし此の星

は、現はれて來た時と同様に、誠に、急に、一月末までには視界から去つた。あはて者は之れがハリ彗星かと、早合點した者もあつたけれど、決して之れはハリ星でなく、全く偶然お出でた飛入り客であつた。

待望のハリ星は、1907年頃から、既に學界の話題となつてゐたが、實際之れがほど豫想の位置に發見されたのは、1909年九月11日で、發見者は獨乙のハイデルベルグ天文臺のヲルフ博士であつた。そして、近日點を通過したのは翌1910年四月19日であつたが、其の頃から、愈々肉眼にも見えるやうになつた。當時は、毎日の早曉に可愛らしい尾を引いてゐた。

自分等の記憶にある此のハリ彗星の絶大な壯觀は、1910年五月20日の曉天の姿であつた。暫く悪い天氣が続いたので、毎日、氣にしながら、彗星はどうだらうかと心配してゐたが、果然、五月20日の朝、幸ひに早く眼がさめて、寄宿舎の東窓を開けて見たところ、殆んど全く晴れた空に、東山の背後から、金星の傍を過ぎて、大きいサーチライトのやうな力強い光芒が天に沖し、其の尾端は、子午線を越えて、西天にまで届いてゐた。“アッ！”と驚いたまゝ、自分も友人も、只、口を開いたまゝ、此の奇觀に聲も出なかつた。少し心が落ちついてから、自分は手早く天のスケチをしたが、其のスケチは今も尙ほ自分は書庫に保存してゐる。近いうちに之れを複寫して、“天界”誌上に載せたいと思つてゐる。

其の日(1910年五月20日)11時過、ハリ星は太陽面を通過した！ 之れも仲々の前景氣であつたが、自分は森教授(今の三高校長)の御許しを得て此の通過する有様を透影して見た。しかし、何も見えなかつた。彗星は透明體だつたのである！

其の年、五月末から六月初めへかけて、日々遠ざかり行く此のハリ彗星は、惜し氣もなく其の美しい姿を、毎夕の西天に見せた。之れも實に今から思ふと楽しい思ひ出であつた。こんなことが、やはり、迷つてゐた自分を馳つて、天文を生涯の友に決定して了つたのであつた。

こんどのカニンガム彗星は、月の關係上、今十二月17日頃から毎夕の西天に見える筈である。日と共に、光や尾は増して、一月6日の夕までは見事な姿が地平に近く、見られるだらう。それから太陽への内合が近づくため、全く見えなくなつて、只、南半球の人々には、近日點通過の15日頃から朝早く東天に見えることとなるだらう。

辛巳年頭書懷

乾 坤 曆 改	瑞 氛 雄 ^{ナリ}	喜 色 新 鮮 千 里 同 ^ジ
銃 後 夜 勤	燈 火 白 ^ク	社 前 朝 拜 旭 陽 紅 ^{ナリ}
黔 首 宜 ^{シク} 爲 ^ス	一 ^レ 心 誓 ^ラ	共 俱 招 寄 泰 平 風 ^{セン}
宏 胸 溢 ^ハ 外 扶 隣 ^ニ 德 ^ヲ	堅 腕 充 ^レ 中 報 國 忠 ^ニ	

神戸關守畔 改發香塢